

皮膚科勤務医人生に悔いなし

稲積 豊子

国家公務員共済組合連合会立川病院皮膚科部長

平成元年に皮膚科入局、35歳時に産休を4カ月取得した以外は、病院勤務医を続けてきました。近所の実家に保育園のお迎えはほぼお任せ、夕食もつくってもらい、恵まれた環境にいたと思います。そのせいか、一人娘は自立心が強く、母の後ろ姿をみて、一生続けていく仕事をもたねばという意識が植え付けられたようです。1つだけ悔しかった思い出をあげれば、保育園でアタマジラミが伝染したのを保育士さんに指摘されたことです。小学校受験、中学受験も経験しましたが、自分にはサポートできなかったのも、完全にプロの個人指導にお任せし、これも至近距離の私立校に滑り込ませました。応援してもらえる家族と子どもの学校が近所にあること、子育て中は大事です。さらに掃除などは週1回来てくれるお手伝いさんに一任、これで休日の家事時間が節約できるのでたいへんありがたい、現在も10数年以上お世話になっています。

このように家のことを人任せにできたお気楽な性格のお陰で、勤務医として30年余り一線で働くことができました。継続できた理由を考えてみますと、医師は重い責任を担う職業のためたいへんなことも多いですが、人から感謝されること、仕事で得られる喜びなどによる満足感がそれを上回るためではないかと思います。とくに皮膚科の臨床医は治療の結果が視覚的にすぐ確かめられ、身近なことを試せる、いくつになってもみたことのない症例に遭遇できるなど魅力に溢れており、皮膚科を選択して本当によかったという思いは年々強くなっています。

ずっと病院勤務医として過ごしてきましたが、ある程度の規模の病院ですと、地域、院内からのさまざまな皮膚疾患の診療要請があります。皮膚・粘膜に異常があればすべて守



備範囲とし、全身管理や外科治療も一通り行っていますが、年月を重ね、実績が蓄積されるほど地域や院内他科(他職種)から必要とされる立場になり、こなさなければならない仕事も増えてきます。多忙な臨床で、確たる研究成果やサブスペシャリティを築くことが困難な勤務医は少なくありません。しかし自分が必要とされる場所に踏みとどまり、マルチプレイヤーとして多種多様な皮膚疾患の治療で社会貢献する、若手を育てる、こういった生き方もあってよいのではないのでしょうか。

最後になりますが、ワークライフバランスは人それぞれ、年齢により刻々と変わります。その時々自分の意欲、体力、環境に合わせて、周囲の支援に感謝の気持ちを忘れず、仕事の場ではプロ意識をもって自分ができることを精一杯に継続して行うことが大切だと思います。